# Cappella Accademica

## 第53回　定期演奏会

指揮　　：　吉川紀彦

管弦楽　：　カペラ・アカデミカ

2023年10月21日（土）13:30開場　14:00開演

浜松市福祉交流センター　ホール

## 御挨拶

本日は、カペラ・アカデミカの第５３回定期演奏会にご来場頂き有難うございます。

カペラ・アカデミカは創立（1974 年）から早いもので、今年で 49 年になります。創立当初はバッハのマタイ受難曲を合唱団と一緒に演奏すると言う目的で設立されましたが、そのうち単独の演奏会を開催することになり今日に至っております。当時の常任指揮者であるバロック音楽の大家故濱田徳昭先生から言われたことは、『バロック時代の作曲家コレッリ・ヘンデル・バッハ等の作品をきちんと、しっかりと勉強しなさい』でした。従いまして初期の作品は、前述の作曲家の作品を多く取り上げております。しかし、時代と共にメンバーも増え、小編成の室内管弦楽団に成長しました。作品も原則モーツァルト位迄と決めバロック期から初期古典派迄の作品、組曲・協奏曲・交響曲等の作品を取り上げ、演奏会を開催してまいりました。来年は 50 周年になりますが、ここで過去を振り返り、バロック期から初期古典派に至る音楽の歴史、特に交響曲の成り立ち等を勉強して見てはとう言う結論に至り、今回の作曲家を取り上げました。日本では有名な作曲家の作品等の演奏会が巷に溢れておりますが、今回演奏する作曲家の作品は、ヨーロッパでは普通に演奏されています。しかし、日本では何故か殆取り上げられません。非常に残念です。私達はこのことを顧みて、私達で出来ることを、ある種の意志を持って作品を取り上げる重要性を認識した次第です。耳慣れない作曲家が多く、もしかすると浜松では初演になるかもしれません。どうか、ご理解ください。本日はその音楽の流れを少しでも感じて、楽しんでいただければ幸いに存じます。

カペラ・アカデミカ団員一同

## カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家で現天皇陛下が師事された故濱田徳昭先生により命名され、1974 年（昭和 49 年）9 月 2 日に誕生しました。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年２回及びその他の演奏会を２～３回開催し、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げることを目標としています。

| 1st Violin | 2nd Violin | Viola | Cello | Double bass |
|---|---|---|---|---|
| 磯部　幸恵 | 磯貝　ゆり | 木下　正明 | 近藤　宏司 | 小林　　哲 |
| ◎釘本　英範 | 今井　重人 | 小林はる奈 | 佐藤　隆行 | 早川　浩一 |
| 永井　正子 | 末田　　良 | 船山　　敏 | 西村美菜子 | |
| 林　　明子 | 村上　香織 | | 浜島　吉男 | |

| Flute | Oboe | Bassoon | Trumpet | Horn | Timpani |
|---|---|---|---|---|---|
| 田代　真理 | 大橋　弥生 | 高木　舞衣 | 岡部比呂男 | 佐藤　博子 | 今泉　好雅 |
| 続　　真樹 | 榑林　　淳 | 斉藤　善彦 | 福田　徳久 | 末永雄一朗 | |

◎はコンサート・マスター

指　揮：吉川　紀彦

# 曲 目 解 説

## ■アレッサンドロ・スカルラッティ(1660～1725):オペラ 「グリセルダ」序曲

バロック期に活躍したイタリアの作曲家で、スカルラッティは、特にオペラとカンタータで名を知られていて、オペラにおけるナポリ楽派の始祖とまで考えられています。スカルラッティの音楽は、フィレンツェ、ヴェネツィア、ローマを中心として目まぐるしく発展した 17 世紀の初期バロックにおけるイタリアの声楽様式とモーツァルトで全盛を極めていた 18 世紀における古典学派との間の重要な橋渡しとして位置づけられていました。今回演奏するオペラ「グリセルダ」序曲は、イタリア風序曲の急−緩−急の法則に則って作曲されています。オペラの内容は、王妃グリゼルダは、貧しい生まれであることから、シチリアの人々から忌み嫌われ、15 年の結婚生活の後に、追放されます。しかし、その後も夫への忠実を貫き、つらい日々の後に、再び、王妃の座に返り咲くまでを描く物語です。 演奏時間は非常に短く 3 分程度の小曲です。第１楽章:プレスト、第２楽章:アダージオ、第３楽章:プレスト

## ■ジョバンニ・バティスタ・サンマルティーニ(1701～1778):シンフォニアト長調 JC39

サンマルティーニは、18 世紀中頃の著名なイタリアの作曲家でありオーボエ奏者でした。彼はしばしば「交響曲の父」と呼ばれ、交響楽形式の発展への重要な貢献で知られています。 本日演奏する交響曲(シンフォニア)は、サンマルティーニの革新的なアイデアと管弦楽法の巧みさを示す、彼のオーケストラ音楽の見本と言える作品です。 ト長調の交響曲は、バロック時代後期のシンフォニアで一般的な速−遅−速にメヌエットが追加された 4 楽章から成り立っています。第１楽章はアレグロ・マノン・トロッポ:活気に満ちた旋律で始まります。サンマルティーニの巧妙な対比するテーマの使用、楽器間の複雑な対話、そしてダイナミックな変化が、始まりから皆様の注意を惹き付けると思います。第 2 楽章はグラーヴェ:活発な第 1 楽章とは対照的にキリストの受難を思わせる様な重も重しい感じの符点のリズムで終始します。第 3 楽章は速いテンポでアレグロ・アッサイ:に戻ります。この楽章はしばしば舞踏的な特性を持ち、サンマルティーニのリズム形式と主題の展開が楽しい活気に満ちた特性を加えています。第 4 楽章はメヌエット舞曲です。通常は楽曲全体の中間あたりに位置しますが最終楽章に持ってきました。面白いですね。そのリズムと優雅な動きが特徴です。

## ■ヨハン・シュターミッツ(1717～1757):シンフォニアニ長調 Op.5−2

シュターミッツは、バロックから古典派時代への移行期における交響曲とオーケストラ音楽の発展における重要な人物でした(マンハイム楽派の創始者)。本日演奏するニ長調のシンフォニアは、編成、ダイナミックな対比、主題の展開における彼の革新的なアプローチを示しています。この交響曲は、通常交響曲によく見られる標準的な速−遅−速の間にメヌエットを挟んだ 4 楽章形式になっています。第 1 楽章アレグロ・アッサイ: 活気に満ちた旋律で始まります。この楽章は主要な主題を紹介し、全曲にわたるエネルギッシュで活発な特性を確立します。シュターミッツのダイナミックな対比とオーケストラのカラーが、魅力的な音楽を提供するかと思います。第 2 楽章アンダンティーノ: 活気のある第 1 楽章とは対照的な雰囲気を提供します。この 2 楽章では、シュターミッツの感情的で抒情的なメロディの創造力が感情に訴えかけます。楽句、アーティキュレーション、ピアノ・フォルのダイナミック差、この楽章の美しさを堪能ください。第 3 楽章はメヌエット舞曲です。途中からトリオに変わりますが、木管楽器のゆったりした優雅で流れるような旋律が特徴です。第 4 楽章は速いテンポのプレスティッシモ:この楽章は、そのリズムの動きと活発な特性が特徴です。シュターミッツのリズムパターン、楽しいテーマ、ダイナミックな対比が非常に面白い構造となっております。途中から木管・金楽器による彼の生まれ故郷のボヘミアンリズムが現れ楽しさが倍増します。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～休憩 15 分間～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**■ヨハン・クリスチャン・バッハ（1735～1782）：シンフォニアニ長調（？W.Clnc2）**

父大バッハと 2 番目の妻アンナ・マグダレーナの末息子（１１男）としてライプツィヒで生まれ、次兄 C.P.E バッハに養育され、大バッハと違い、ヨーロッパを股にかけベルリン、イタリア、イギリスなどで活躍した作曲家です。J.C.バッハの音楽は、優雅なメロディ、明確な構造、感情的な表現が特徴です。彼はバロックと古典派の時代の移行期の重要な存在であり、彼の作品はしばしば形式的な構造と抒情的な美しさとの洗練されたバランスを見せています。第 1 楽章はアレグロ・アッサイ：その活気に満ちたエネルギッシュな性格が特徴です。旋律線の明瞭さ、ダイナミックな対比、正確なアーティキュレーションに注目して、異なる主題間の対比を引き立てています。第 2 楽章はアンダンテ・ウン・ピユ・レント：ゆっくりとした抒情的旋律。統制された楽句と感情豊かなダイナミクスの使用を通じて音楽の感情的な奥深さを表しています。弦楽器とフルートとの会話をお楽しみください。最終楽章第 3 楽章アレグロ・アッサイ：本来であれば第 3 楽章はメヌエットのはず？ですが有りません。第 3 楽章は 1 楽章と 3 楽章はほぼ同じで 3 楽章は途中で終わるよう作曲されています。いたずら？或いは、他の誰かが適当に繋ぎ合わせたのか？実に不可解です。

**■カール・ディッタース・フォン・ディッタースドルフ（1739～1799）交響曲第 1 番ハ長調「世界の4つの時代」**

ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンは、ウィーン古典派と呼ばれていますが、この３人以外ウィーンで活躍していた特筆すべき作曲家を挙げてみると数人いるようですが、そのトップは当時オペラでモーツァルトを凌ぐ人気を誇っていた作曲家、ディッタースドルフではないでしょうか。今回演奏する交響曲第 1 番の題材はギリシア神話の「変身物語」だと言うことが分かりました。つまり、材料は、古代ローマの詩人オウィディウスによるラテン文学の名作です。交響曲と言う名前はついていますが、それぞれに表している物語が背景にある事に気づきます。4 つの時代(Die vier Weltalter)は、交響詩的な作品で、4 つの楽章から成り立っています。各楽章は以下の通りです。

第 1 楽章ラルゲット″L'età dell'oro″（黄金時代）: 豊かさと平和が支配する時代を表現しています。明るく喜ばしい音楽が特徴です。

第 2 楽章アレグロ・エ・ヴィヴァーチェ ″L'età dell'argento″（銀の時代）: 人々の生活が簡素化し、競争や戦争が少しずつ増えていく時代を表しています。音楽はより厳粛な雰囲気を持っています。

第 3 楽章メヌエット・コン・ガルボ ″L'età del rame″（銅の時代）: さらに戦争が増え、人々の行動が荒々しくなる時代を表現しています。楽章は力強さと緊張感に満ちています。

第 4 楽章″L'età del ferro″（鉄の時代）: 最も暗い時代であり、人間社会の腐敗や悪行が顕著になる時代を描写しています。音楽は重苦しく、暗いテーマを反映しています。